Japanese Physical Therapy Association

# 193. 全身性関節弛緩症と足関節不安定性との関連について

【キーワード】
全身性関節弛緩症・足関節不安定性・重心動揺

長崎大学医学部付属病院　理学療法部
大城　昌平・松本　　司・横山　茂樹
藤田　雅章・松坂　誠應(MD)
光晴会病院
池山　睦子

<はじめに>

全身性関節弛緩症（以下、ＧＪＬ）が足関節の不安定性にどのように関与しているかについて、捻挫の既往、スポーツ歴の有無に分け、Ｘ線ストレステスト、及び重心動揺による検索を行い検討したので報告する。

<方法と対象>

ＧＪＬは、栗山らに準じて８徴候をチェックし、４徴候以上を有するものを陽性とした。症例は、４８例（９６関節）で、年齢は１２才－２９才（平均年齢１８．４才）、男性７例、女性４１例である。ＧＪＬ群を捻挫の既往の有無、３年以上のスポーツ歴の有無に分け、Ｘ線ストレステストの距骨前方移動度（ＡＴＤ）、距骨傾斜角（ＴＴＡ）について正常例のＡＴＤ３０例（３０関節：３．０±０．８mm）、ＴＴＡ１００例（２００関節：３．７±０．３°）と比較した。

重心動揺の検索は、ＧＪＬの１５例（３０関節）をＸ線ストレステストで異常値を示し、捻挫の既往歴のある群（２１関節）とＸ線ストレステストで異常値を示さず、捻挫の既往歴のない群（９関節）の２群に分け、対照群の正常２０例（４０関節、平均年齢２２．３才、男性８例、女性１２例）と比較検討した。重心動揺の測定方法、及び解析方法は第２３回本学会の報告に準じた。

<結果>

捻挫の既往についてみると、１）捻挫の既往のある群が４９関節、捻挫の既往のない群が４７関節であまり差はなかった。２）捻挫の既往のない群ではＡＴＤ・ＴＴＡとも対照正常値と有意差はなく近似値を示したが、捻挫の既往のある群でＡＴＤ・ＴＴＡとも、有意に大きい値を示した。（Ｐ<０．０１）　両群間には、ＡＴＤ・ＴＴＡとも有意差が認められた。（Ｐ<０．０１）　３）スポーツ歴のない群では、捻挫の既往のない群（２２関節）で、ＡＴＤ・ＴＴＡとも対照値と有意差はなく近似値を示したが、捻挫の既往のある群（１０関節）で、有意に大きい値を示した。（Ｐ<０．０１）　両群間には、ＡＴＤ・ＴＴＡとも有意差が認められた。（Ｐ<０．０５）　４）スポーツ歴のある群では、捻挫の既往のない群（２５関節）で、ＡＴＤ・ＴＴＡとも対照値と有意差はなく近似値を示したが、捻挫の既往のある群（３９関節）で、有意に大きい値を示した。（Ｐ<０．０１）　両群間には、ＡＴＤ・ＴＴＡとも有意差が認められた。（Ｐ<０．０１）　５）スポーツ歴のない、捻挫の既往のない群とスポーツ歴のある、捻挫の既往のある群の間にはＡＴＤ・ＴＴＡとも有意差が認められた。（Ｐ<０．０１）

重心動揺の測定結果は、１）Ｘ線ストレステストで異常値を示し、捻挫の既往歴のある群は、対照正常群に比し、重心動揺は有意に大きかった。（ＳＤ　ＡＲＥＡ、ＲＭＳ、ＳＤ　Ｘ、ＳＤ　Ｙ：Ｐ<０．０１）　２）Ｘ線ストレステストで異常値を示さず、捻挫の既往歴のない群は、対照群に比べ、わずかに大きい傾向にあるが有意差は認められなかった。３）両群との比較も２）と同様の結果が得られた。

<考察>

今回、全身性関節弛緩症と足関節のＸ線ストレステスト、捻挫の既往との関連について、４８症例９６関節を対象にスポーツ歴の因子も加え検討した。その結果、ＧＪＬ群が必ずしもＸ線ストレステストの結果で異常値（機械的不安定性）を示さず、スポーツの有無にかかわらず、捻挫の既往の有無が足関節のＸ線ストレステストの結果（機械的不安定性）に大きく関与していることが示唆された。

次に、重心動揺の測定結果においてＧＪＬを有する群は、対照正常群と比べ、わずかに動揺は大きい傾向にあるが有意差は認められず、Ｘ線ストレス撮影の異常値と捻挫の既往がある群で有意に大きい値（機能的不安定性）を示した。この結果より、Ｘ線ストレス撮影の結果と同様に、ＧＪＬが必ずしも直接的に足部の機能的な不安定性に関与しているのではなく、捻挫の既往と機械的不安定性の関与が重要な因子であることが推測された。



NII-Electronic Library Service